

特別展「始皇帝と大兵馬俑」開催記念国際シンポジウム

秦王朝と兵馬俑 —発掘された歴史の実像—



平成27年12月19日（土）
東京国立博物館平成館大講堂

表紙 1号兵馬俑坑

裏表紙 兵馬俑の出土状況

いずれも© 陝西省文物局・陝西省文物交流中心・秦始皇帝陵博物院

国際シンポジウム開催にあたって

このたび特別展「始皇帝と大兵馬俑」を記念して、国際シンポジウムを開催いたします。このシンポジウムでは、国内外の第一線で活躍する研究者をお招きし、秦王朝と兵馬俑に関する考古学の最新成果を踏まえて、歴史書には記されていない数々の謎に迫るものです。たとえば、山あいの小国から中国史上初めての統一帝国になった秦とは、どのような文化を有する国だったのでしょうか。その文化のありようを通して、秦の成功の秘密を読み解きます。また、始皇帝が巨大な陵墓を作らせ、そこに副葬させた8000体もの兵馬俑は、何を表わしたもののなのでしょう。その意味に迫るとともに、近年明らかになった新知見をご紹介します。兵馬俑を含む始皇帝陵に象徴された秦王朝の絶頂と、そこにいたるまでの長い道のり。発掘と研究によって少しずつ見えてきた、秦の新たな歴史像をお楽しみください。

東京国立博物館

特別展「始皇帝と大兵馬俑」

東京国立博物館 ：2015年10月27日(火)～2016年2月21日(日)
九州国立博物館（福岡） ：2016年3月15日(火)～6月12日(日)
国立国際美術館（大阪） ：2016年7月5日(火)～10月2日(日)



プログラム

2015 年 12 月 19 日 (土)

司会：谷豊信（東京国立博物館 学芸研究部長）

10:00 ～ 10:10

開会挨拶

銭谷眞美（東京国立博物館 館長）

10:10 ～ 11:00

基調講演 秦王朝と兵馬俑の考古学

川村佳男（東京国立博物館）

11:00 ～ 11:50

報告1 秦鏡と秦人の“破鏡”習俗について

宋遠茹（陝西省考古研究院）

11:50 ～ 12:50（休憩・60分）

12:50 ～ 13:40

報告2 秦王朝を駆けた馬

菊地大樹（京都大学人文科学研究所）

13:40 ～ 14:30

報告3 秦始皇帝陵および陪葬坑の考古学的新発見

陳洪（秦始皇帝陵博物院）

14:30 ～ 14:45（休憩・15分）

14:45 ～ 15:35

総合討論

15:35 ～ 15:45

閉会挨拶

松本伸之（東京国立博物館 副館長）



基調講演 秦王朝と兵馬俑の考古学

川村佳男（東京国立博物館 主任研究員）

秦の歴史は『史記』『戦国策』など文献資料が豊富に存在する。そのあらましは、遅くとも紀元前9世紀の西周時代後期には当時の中国文明圏の西端に位置した小国が、春秋戦国時代（前770～前221年）における他国との戦乱を勝ち抜き、ついには始皇帝によって中国史上初めての統一王朝となる、というものである（図1、表1・2）。しかし、始皇帝の死からわずか3年後の前206年に秦王朝は内乱によって瓦解し、漢王朝に取って代わられる。秦の歴史はこのように劇的であり、また、中国初の統一帝国となったという点で、中国のみならず東アジア全体の歴史にも強烈なインパクトを与えた。

しかし、秦の歴史のすべてが歴史書に記録されているわけではない。知られざる秦の歴史や文化に光が当たるようになるのは、20世紀になって中国に考古学が導入されてからのことである。今日では世界中にその名を知られている兵馬俑もまた、1974年に発見されたものである。発掘された遺跡や遺物から、秦の歴史と文化について何が分かるようになったのか。また、兵馬俑の調査研究はこの約40年間でどのように進んでいったのか。本稿は、このふたつの問題を中心として秦王朝と兵馬俑の考古学のこれまでを点描し、本稿につづく報告の理解のための一助としたい。

なお、20世紀以降相次いで出土している簡牘などの文字資料も、秦の歴史像を見直す重要な役割を果たしている。しかし、ここでは紙幅の都合により、出土文字資料による秦の歴史研究については割愛せざるを得ない。ご了承ください。



図1 拡大する秦の勢力範囲

一、秦王朝の考古学

1. 「秦墓」の発見 中国の考古学では、遺跡はおおむねふたつに分けられている。ひとつは墓地遺跡であり、もうひとつは墓地以外の生活遺跡、つまり、都市・宮殿・村落などである。墓は地下に構築されるので、盗掘にさえ遭わなければ、一般的に比較的残りやすい。一方、生活遺跡は地上に遺存するので、

長年の風雨による浸食や戦災を受けやすく残りにくい（もちろん、堅固な工法で築かれた城壁や宮殿のような大型建築の土台、固く焼きしめて作られた陶製の瓦やレンガを含む建材など、例外も部分的に存在するが）。つまり、中国の考古学は生活遺跡よりも墓地遺跡とその出土品に比重を置いて組み立てられてきた。秦の考古学もまた然りである。

1940年代より陝西省各地で発掘された春秋戦国時代から秦時代にかけての墓地遺跡は、かつてこの地を本拠地とした秦の人々がどのように死者を埋葬し、どのような副葬品を墓に納めたのか、という秦の葬送にまつわる習俗や観念を知るための手がかりを示した。たとえば、これらの遺跡の墓坑では被葬者が手足を伸ばした状態ではなく、両手を重ね、両膝を曲げた姿勢で発見されることが多い。こうした姿勢の埋葬形態を屈肢葬くつしそうという。今日の考古学界では、屈肢葬は秦人の墓にそなわるもっとも典型的な特徴のひとつとして見なされている（図2）。

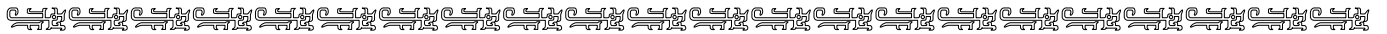


図2 秦墓を象徴する屈肢葬の被葬者（咸陽市文物考古研究所『任家嘴秦墓』科学出版社、2005年より）

墓に副葬された数々の青銅器、土器、玉器のなかにも、秦固有の形態や装飾をもつもの

があること、さらに、春秋戦国時代から秦時代にかけてそれらがたどった消長や形態変化についても大部分が明らかにされた。もともと古代中国において青銅器は、先祖の霊や神に料理や酒を供える祭祀儀礼用の神聖な容器であった。秦では春秋時代から、この祭祀儀礼用の青銅器を土器に写し、彩色を加えた「加彩陶」が発達した。加彩陶はいびつな器形に加えて、窯のなかで焼成したときの温度が低めであったために胎土が軟らかい。また、顔料で表面に直接彩色しているので色も落ちやすく、実用には向かない。はじめから副葬専用に使われた仮の器であることが分かる。このほか、穀倉などの陶製ミニチュア模型も秦の墓ではしばしば出土する。これは死後も存在すると信じられた靈魂の冥界における生活に供した「明器」めいきの先駆けとなるものである。この死生観はみずからの陵墓に大量の備よう（被葬者の冥界における生活を支えるために製作された人物や動物の像）を副葬させた始皇帝だけでなく、その後の中国歴代王朝にも引き継がれ、各種各様の明器や備を作りだす思想的背景となった。

考古学の発掘と研究の蓄積は、屈肢葬や副葬品の形状などによって、墓地遺跡のなかから秦の人々が営んだ「秦墓」の抽出を可能にさせた。秦墓に関するこれまでの認識は、秦文化全体を構成する微小な一部分に過ぎないのかもしれない。それでも、歴史書の記載だけでは知り得なかった秦墓の実態は、その文化が屈肢葬のような強い個性をもつものであると同時に、漢・唐など歴代王朝にも継承された明器のような一定の普遍性をもつものでもあることを物語っている。本予稿集に掲載された宋遠茹氏の報告「秦鏡と秦人の“破鏡”



習俗について」は、墓に副葬された銅鏡の形態を分析することで、秦墓の研究に新たな地平を切り開こうとするものである。あわせてご覧いただきたい。

2. 「早期秦文化」の発見 秦墓およびその出土品を基軸にして秦に特徴的な考古学的事象、つまり「秦文化」と呼ぶべきものの実態が考古学を通しておぼろげながら見えてくると、今度は秦文化を特徴づけるいくつかの主要な要素がどこまで遡るのかを探索しようとする動きが中国考古学界のなかで生じた。その重要な契機となったのが、1982年と83年に甘肅省東部の甘谷県毛家坪遺跡で行われた発掘である。

毛家坪遺跡は西周時代の前10世紀から戦国時代の前3世紀まで、約700年もの長期にわたって存続した。春秋戦国時代の墓などからは、隣接する陝西省の秦墓で出土するものと大差のない形状の土器が出土し、屈肢葬も認められた。西周時代の墓からも、屈肢葬で埋葬された遺体や器種の構成や形状が後の秦のそれに近い一群の土器が出土した。このことは秦の人々が西周時代においては現在の甘肅省東部一帯を勢力範囲とし、春秋時代になると東の陝西省に進出して勢力範囲を拡大したとする『史記』秦本紀などの史実を裏付けるものとして注目を集めた。毛家坪遺跡で発見された西周時代に遡る秦系統の墓は、その後、甘肅省東部においてほかのいくつかの遺跡でも発見されたが、春秋時代以降に秦の本拠地となる陝西省ではまだ見つかっていない。そこで西周時代以前の秦墓に代表される甘肅省東部の遺存は「早期秦文化」と呼ばれ、出現して間もない頃の秦の謎多き歴史と文化を読み解く重要な資料として認識される

ようになった。

毛家坪遺跡の発掘がもたらした、もうひとつの大きな衝撃は、春秋戦国時代の地層から秦文化とは明らかに異質な遺存が大量にみつかったことである。たとえば、この遺存を構成する土器は赤味がかった色のものが多く、焼成温度が低くて比較的軟質な胎土をもつ。その代表的な土器のひとつで炊事に用いた3本足の鬲は、表面に縄文がない。足の作りはひとつひとつが袋状を呈しており、先端に柱状ないし板状の突起をもつ。同じ遺跡の同時代の地層から出土した秦文化の鬲と比べてみると、違いは一目瞭然である。すなわち、秦の鬲は灰色に硬く焼きしめられており、表面を縄文が埋め尽くす。足の作りは3本の足が内湾しながら底部で相互に接続するもので、先端に顕著な突起はない（図3）。つまり、秦の人々は西周時代から毛家坪に居住していたが、春秋戦国時代になると別の文化をもつ集団といっしょに住むようになったのである。

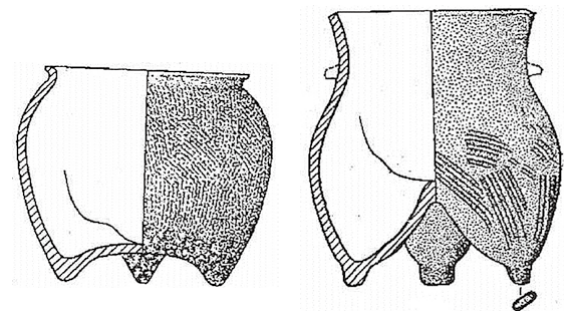
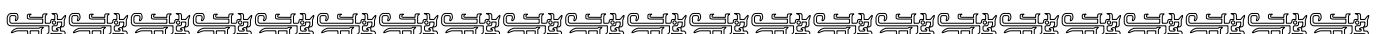


図3 毛家坪遺跡で出土した秦文化の鬲（左）と西戎文化の鬲（右）（縮尺不同）
（甘肅省文物工作隊・北京大学考古学系「甘肅甘谷毛家坪遺址発掘報告」『考古学報』1987年第3期より）

この集団はいったい誰なのか。

この集団を特徴づける、袋状の足の先端に板状の突起をもつ「鏟足鬲」^{さんそくれき}を主体とする土器群は、古代中国の西北に広がる高原地帯に





広く分布していたことがわかっている。文献によると、当時、この一帯では「西戎」「犬戎」などと呼ばれる集団が活動していたとある。呼称が複数存在するのは、いくつかの部族に分かれていたためと考えられる。しかし、漢字、青銅器、玉器などを使って先祖や神を祭った当時の中国文化圏とは異質な文化を有し、おもに農業ではなく馬や羊の牧畜によって西北の高原地帯に暮らしていた点では、共通する。春秋戦国時代の毛家坪で秦人と共存していた集団が、細部について諸説はあるものの、西戎と総称された人々の一派であったことに異論はない。

近年、陝西省北部や甘肅省東部において、西戎に連なる集団の大規模な墓地遺跡が相次いで発掘され、新たな知見が大量にもたらされた。なかには、秦から将来されたと考えられる青銅器も少なからず見つかった墓もある。一方で、西戎などの異文化が秦文化に影響を及ぼした痕跡も見つかっている。古代中国文化圏の西端に位置した秦の歴史と文化を語るうえで、その東方にあった同文化圏中枢の国々との関わりだけでなく、その西方と北方にあった中国文化圏外の異文化との関わりも、もはや見過ごすことはできない。

秦が西戎をはじめとする異文化と積極的に関わりをもった主要な理由のひとつは、馬であろう。そもそも秦は馬の飼育で功績をあげて西周王朝から認められることで、歴史の表舞台に登場した。それほど古代中国において馬は重要な軍事力であり、また王侯貴族にとっては権威の象徴でもあった。その秦よりもさらに良質な馬の飼育や、より有効な戦力としての馬の運用に長けていたのが、西戎をはじめとする中国西方・北方の人々であっ

た。西戎と活動範囲が西周時代から交接あるいは部分的に重複していた秦には、果たしてどのような馬がいたのだろうか。菊地大樹氏が動物考古学の成果も踏まえつつ、報告「秦王朝を駆けた馬」で詳しく述べている。

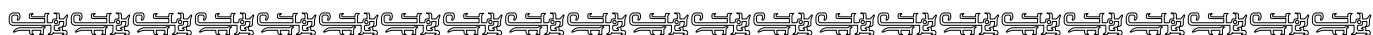
このほか、^{ようじょう}雍城や^{かんよう}咸陽といった都城や君主墓など秦の国家中枢に当たる施設の遺跡が発掘されている。これらは春秋戦国時代から秦時代にかけて秦の権力と権威が宮殿などの大型建築や陵墓にどのように表象されていたのかをよく示している。

二、兵馬俑の考古学

1. 兵馬俑の研究史 兵馬俑に関する考古学は、兵馬俑を出土した兵馬俑坑の発掘だけでなく、それを取り巻く始皇帝陵全体に対する調査・発掘とともに進展してきた。なぜなら、兵馬俑坑が始皇帝陵にともなう数多くの施設のひとつであり、兵馬俑もまたこの陵墓と不可分のものであることを中国の考古学者たちは早くから認識していたからである（図4）。兵馬俑の考古学研究史は、おもに次の4つの時期に区分することができる。すなわち、第1期：1974年の兵馬俑発掘以前、第2期：1974年～80年代における兵馬俑の発見、第3期：1995年～2008年における始皇帝陵の調査・発掘の発展期、第4期：2009年以降の始皇帝陵・兵馬俑坑に対する調査・発掘の成熟期、である。

第1期：1974年の兵馬俑発掘以前 兵馬俑の発見以前から、現在の陝西省西安市臨潼区にある始皇帝陵の存在は知られていた。明時代の都穆は始皇帝陵のうち地上に遺存していた墳丘とそれを取り巻く内外二重の城壁および城門の寸法を『^{りざんき}驪山記』に記録している。20世





紀初頭には日本とヨーロッパの研究者が始皇帝陵の墳丘を実測している。1962年には本格的な調査とボーリングが中国人研究者によって行われ、墳丘と城壁の平面図を作成するとともに、内城の東・西・北門と外城の東門の遺構を発見した。また、「麗山園^{りざんえん}」の銘文をもつ青銅器が1958年に始皇帝陵の東側から偶然出土したことで、この陵墓が古文献に記された「麗山」、つまり始皇帝の陵墓であることが出土文字資料によって初めて裏付けられた。

中国では20世紀初頭から戦国・漢・南北朝・随・唐時代などの俑が多数出土してきた。中国の考古学者による俑の熟知は、後の兵馬俑出土時にそれが始皇帝陵にともなう副葬品の一種であるという円滑な認識に役立ったはずである。

第2期：1974年～80年代における兵馬俑の発見

1974年3月に始皇帝陵の墳丘から東へ約1.5キ

ロの地点で兵馬俑が偶然見つかり、同年7月には早くも本格的な調査が実施された。この調査によって、兵馬俑を出土した陪葬坑^{ばいそうこう}「1号兵馬俑坑」の範囲（東西230メートル、南北62メートル）が明らかとなり、試掘された。同時に始皇帝陵の内城と外城に対する調査が行われ、正方形と考えられてきた内城の平面形が実際は長方形であることが判明した。1976年2月には外城の東側で馬廐坑^{ばきゆうこう}98基が、同年4月には2号兵馬俑坑と3号兵馬俑坑が相次いで発見、翌年にかけて試掘された。1977年には石材加工場と珍奇な動物や鳥を集めて埋めた「珍禽異獣坑^{ちんきん いじゅうこう}」が見つかった。1978年5月には1号兵馬俑坑の東部で正式な発掘が初めて行われた。1980年には墳丘の西側に隣接する銅車馬坑で2両の銅車馬が発掘された。このように兵馬俑を発見した1974年から約10年間は、毎年のように兵馬俑坑の発掘と試掘が行われる

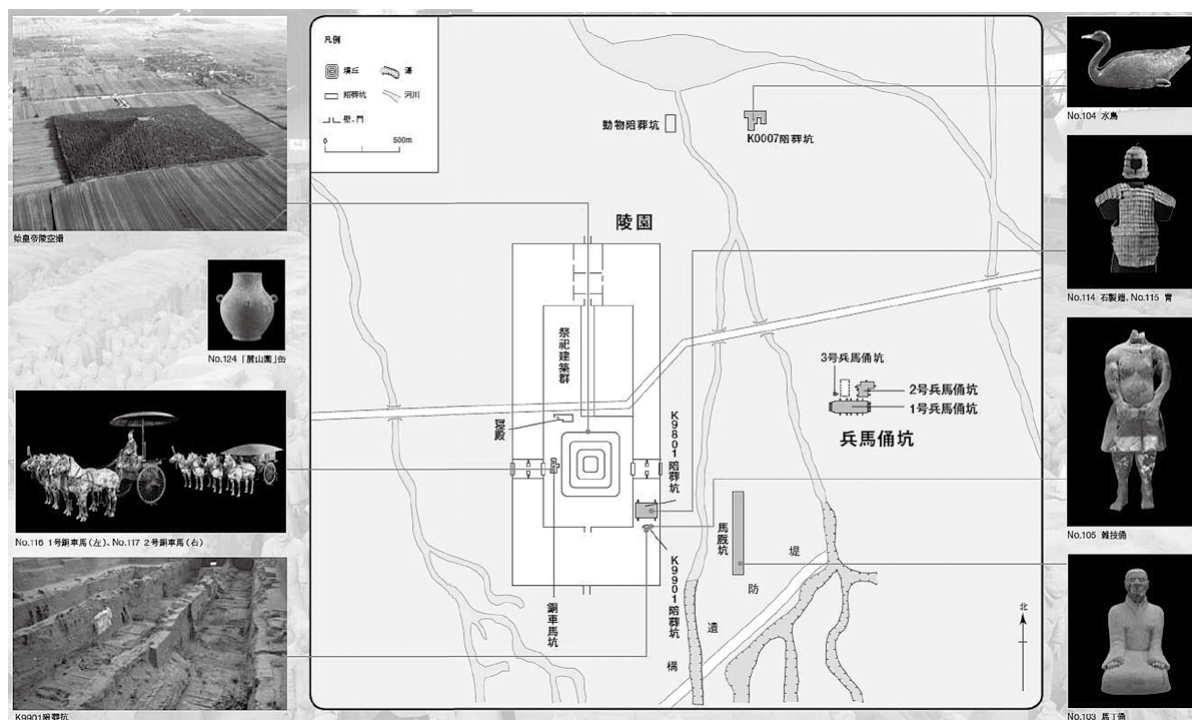


図4 始皇帝陵の地図とおもな出土品 ©D_CODE
(東京国立博物館他『始皇帝と大兵馬俑』NHK他、2015年より)





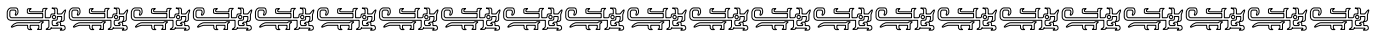
とともに、墳丘を二重に取り囲む城壁の内外で陪葬坑、陪葬墓、石材加工場、始皇帝陵建築作業者の集団墓地、地上に建設されたさまざまな大型建築の遺構などが続々と見つかった。この段階で、始皇帝陵の墳丘を中心としてその外側に広がる「陵園」（陵区）の面積が約56平方キロメートルに及び、その地上と地下にさまざまな関連遺構のあったことがわかった。また、兵馬俑坑は1979年に「秦始皇兵馬俑博物館」として一般公開された。

第3期：1995年～2008年における始皇帝陵の調査・発掘の発展期 1980年代半ばより始皇帝陵の調査はしばらく行われていなかった。しかし、1995年の道路拡張工事にともなう緊急調査で6組の大型建築遺構が発見されたのをきっかけに、その後は毎年のように発掘と調査が再び実施されるようになり、陪葬坑や建築遺構などの新発見が相次いだ。この時期の主要な成果として、1998年7月と翌年に陪葬坑「K9801」で出土した石製鎧冑、1999年に陪葬坑「K9901」で出土した雑技俑（百戲俑）、2000年に陪葬坑「K0006」で出土した8体の文官俑、2001年に陪葬坑「K0007」で出土した46体の青銅製水鳥と15体の俑などがある。これにより、始皇帝陵にともなう陪葬坑の種類が兵馬俑坑・馬廐坑・銅車馬坑以外にも非常に多岐にわたって存在していたとともに、そこに副葬された俑や器物の種類もまた極めて豊富であったことが明らかになった。また、兵馬俑の表面に残った彩色を失わせることなく保存処理する手法が、実験を積み重ねて完成した。これにより、従来行い得なかった兵馬俑の彩色に対する調査研究も実施することができるようになった。第3期に調査・発掘された建築遺構には、内城・外城

の城壁の一部、内城・外城の東・西門とその門闕、内城・外城の南門、城壁の内外に分布する大型・小型の陪葬墓、地下宮殿（始皇帝が埋葬された広大な地下空間で、墳丘の地下30メートルに位置する）をめぐる排水システムなどがある。また、さまざまな科学技術を応用した調査も行われ、墳丘の構造、地下宮殿の構造・範囲・深さなどがわかった。とくに未発掘でありながら、地下宮殿が東西約80メートル、南北約50メートル、高さ約15メートルもあることを示したこのときの成果は、従来のボーリングや発掘などに加えて、最新の科学技術が極めて有効な手段になりうることを証明した。

第4期：2009年以降の始皇帝陵・兵馬俑坑に対する調査・発掘の成熟期 2009年、開館から30年の節目を迎えた秦始皇兵馬俑博物館は「秦始皇帝陵博物院」になった。たんに改称しただけでなく、従来の1～3号兵馬俑坑の遺跡展示を残しつつ、遺跡公園として整備された始皇帝陵と一体化させることで、兵馬俑坑を含む始皇帝陵全体の調査・研究・保存・展示などをより包括的に進めうる環境と体制が整った。始皇帝陵の墳丘を中心とする「秦始皇陵遺址公園」は2010年に正式に開園し、翌年には陪葬坑K9901、K0006が展示公開された。同時に陪葬坑K0006には、2000年以降の2回目となる発掘が実施され、出土品は現場の展示施設に併設されたラボのなかでより迅速かつ安全に修復が行われた。近年は1号兵馬俑坑の発掘も実施された。その新たな成果については、陳洪氏の報告をご参照いただきたい。また、兵馬俑坑を含む始皇帝陵全体のデータはすべてGIS（地理情報システム）によって一括管理できるようにした。これは





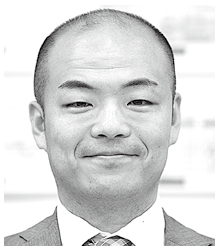
秦始皇帝陵博物院設立の意義を調査研究の面で示す象徴的なプロジェクトであり、始皇帝陵に含まれる各種遺構のデータをより高い精度で計測・記録・解析できるようになった。このほか、東海大学の恵多谷雅弘氏・学習院大学の鶴間和幸氏と秦始皇帝陵博物院らによる衛星データを用いた日中共同調査は、巨大な始皇帝陵全体の空間構造や南にそびえる驪山との位置関係を系統的に明らかにした。

2. 兵馬俑に関する考古学の回顧と展望 以上に記した兵馬俑に関する考古学の歴史を振り返ると、次のような方向で発展してきたことがわかる。まず、兵馬俑の造形（装備・姿勢・髪型など）に対する個別的な属性の分析があり、1980年代には、兵馬俑が全体で何を意味するのかを問う研究が進展した。第3期に文官俑や雑技俑など未知の種類のものや彩色兵馬俑に注目が集まると、それぞれが何を表わしたもののなのかという個別的な解釈と同時に、いわゆる従来の将兵や軍馬を象った兵馬俑と新出の俑を含めて、兵馬俑とは何なのかが総体的に問われるようになった。この時期になると、兵馬俑の研究が始皇帝陵のそれと不可分のものであることは一層強く認識された。第4期はGISや衛星データなどコンピューターの最新技術も採用することで、始皇帝陵の立地環境など、より包括的・巨視的な研究も可能になった。このように、始皇帝

陵の全容は「粗」から「精」へと精度を高めながら徐々に明らかになりつつあるが、兵馬俑と兵馬俑坑の調査もまた同様である。秦始皇帝陵博物院をはじめとする考古学者たちの不断の調査研究により、これまで知りえなかった多くの知見が、今後も私たちを驚かせてくれるに違いない。

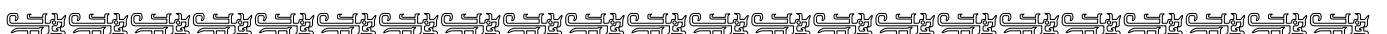
おもな引用・参考文献

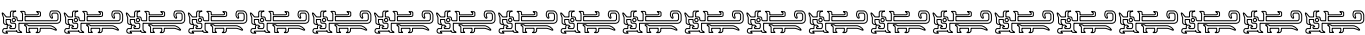
- 袁仲一『秦兵馬俑の考古発現与研究』文物出版社、2014年
甘肅省文物工作隊・北京大学考古学系「甘肅甘谷毛家坪遺址発掘報告」『考古学報』1987年第3期
咸陽市文物考古研究所『任家嘴秦墓』科学出版社、2005年
黄曉芬「秦の墓制とその起源」『史林』第74巻第6号、1991年
焦南峰・段清波「陝西秦漢考古四十年紀要」『考古与文物』1998年第5期
秦始皇帝陵博物院編『真彩秦俑』文物出版社、2014年
曾布川寛「秦始皇陵と兵馬俑に関する試論」『東方學報』第58冊、1986年
段清波『秦始皇帝陵園考古研究』北京大学出版社、2011年
張衛生「秦始皇帝陵園範圍研究」秦始皇帝陵博物院『秦始皇帝陵博物院 2013』総参輯、三秦出版社、2013年
趙化成「甘肅東部秦和羌戎文化的考古学探索」俞偉超『考古類型学の理論与实践』1989年
陳洪「関中秦墓出土青銅器編年研究」『文博』2012年第5期
陳洪「関中秦墓出土陶器編年研究」『考古与文物』2014年第6期
鶴間和幸・恵多谷雅弘『宇宙と地下からのメッセージ』D-CODE、2013年
東京国立博物館・九州国立博物館他『始皇帝と大兵馬俑』NHK・NHKプロモーション・朝日新聞社、2015年
滕銘予『秦文化：從封国到帝国的考古学觀察』学苑出版社、2002年
滕銘予「関中秦墓研究」『考古学報』2012年第3期



川村 佳男 [かわむら・よしお]

1975年生まれ。神奈川県逗子市出身。修士(史学)。2002年、國學院大學大学院博士課程(後期)入学。同年8月より2005年まで山東大学歴史文化学院に中国政府奨学生として留学。2005年7月、國學院大學大学院博士課程(後期)中途退学。同年8月より東京国立博物館にて東洋考古担当研究員として勤務。現在に至る。主な著書に『始皇帝と大兵馬俑』(共著)、『漢・唐時代の陶俑』(共著)などがある。



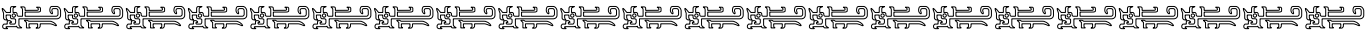


世紀・年代	時代	秦の歴史
前9世紀	西周	周の孝王(在位:前891?～前886?)に仕えた非子が馬の牧畜に功績をあげ、嬴姓と土地を拝領する。秦の始まり。この頃より、甘肅省南部を勢力範囲とする。
前770	春秋	周王朝が東方の洛陽に遷都(東周)。 周王を警護した秦の襄公が西周の本拠地だった岐山以西に諸侯として封ぜられる。秦の正式な建国。
前7世紀		徳公が雍城(前677～前383)に遷都。
前624		穆公が西戎の覇者となる。
前403	戦国	晋が趙・魏・韓の三国に分裂。戦国時代となる(前476年を戦国時代の始まりとする説もある)。
前4世紀半ば		孝公が咸陽(前350～前206)に遷都。 この頃、商鞅による政治改革で、秦の国力が強まる。
前324		秦の恵文王(在位:前338～前311)が初めて王の称号を用いる。
前3世紀前半		昭襄王(在位:前307～前251)、秦の版図を大いに広げる。前256年、周を滅ぼす。
前247		嬴政が秦王に即位。前230年の韓を皮切りに、他国を次々と滅ぼす。
前221	秦	齊を滅ぼして、天下を統一。秦王・嬴政が中国で初めて皇帝を号す(始皇帝)。
前210		始皇帝、死去。二世皇帝が継ぐも、陳勝・呉広の乱が勃発。
前206		秦が滅び、前漢時代になる。

表1 秦の歴史年表

西暦	秦暦	事項
前259	昭襄王48年	嬴政、人質として送られていた秦の公子(後の莊襄王)の子として趙国で生まれる。
前247	莊襄王3年	秦の莊襄王、死去。秦本国に戻っていた嬴政が13歳で秦王に即位。翌年が秦王政元年。
前237	秦王政10年	秦王政が嫪毐の反乱を前年に鎮圧。政を補佐してきた重臣・呂不韋を罷免し、親政を始める。
前230	秦王政17年	秦が韓を滅ぼす。
前227	秦王政20年	燕の刺客・荊軻による政の暗殺未遂。
前225	秦王政22年	秦が魏を滅ぼす。
前222	秦王政25年	秦が燕、趙(代)、楚を滅ぼす。
前221	始皇帝26年	秦が齊を滅ぼし、中国で初めて天下を統一。秦王政は皇帝を号し、始皇帝となる。
前219	始皇帝28年	始皇帝の巡行。泰山(現山東省)にて封禪の儀式を行う。この頃より、不老不死の存在「仙人」に傾倒する。
前218	始皇帝29年	始皇帝、巡行途中の博浪沙で暗殺未遂に遭う。
前215	始皇帝32年	秦が北方の騎馬民族・匈奴と戦争。
前214	始皇帝33年	秦が南方と北方に領土を拡張。
前213	始皇帝34年	始皇帝が長城を築造させる。いわゆる「焚書」を行う。
前212	始皇帝35年	始皇帝が阿房宮を造営させる。いわゆる「坑儒」を行う。
前210	始皇帝37年	始皇帝、第5回巡行の途中で死亡。末子・胡亥が二世皇帝に即位。

表2 始皇帝の年表





報告1 秦鏡と秦人の“破鏡”習俗について

宋遠茹（陝西省考古研究院 副研究員）

銅鏡は銅を主要な原料として製作した化粧用の姿見である。これまでに発見された資料では、中国最古の銅鏡は今から4000年前の甘肅省で栄えた齊家文化^{せい か}で出土したものである。その後、銅鏡は数千年の発展と変化を経て、近代にガラス鏡が盛行するまで、歴史の舞台にありつづけた。秦漢時代は銅鏡の最盛期に当たる。本稿のいう秦鏡とは、秦時代の銅鏡全般のことではなく、春秋戦国時代と秦統一時代に秦人が使用した銅鏡のことを指す。ここでは陝西地区で出土した秦鏡を例に、秦鏡と秦人の“破鏡”習俗について分析をおこなう。

若干の遺漏もあろうが統計によると、陝西地区で発掘された秦墓は1千基近くあり、銅鏡は151面出土している。いずれも円形で、直径は7～10センチのあいだに収まる。鏡体は薄手で、鏡面は平滑にして光沢をもつ。鈕^{ちゆう}は小さな弦状の突起が併行する橋梁形を呈し、鏡縁は平坦か微妙に反りあがる。銅の色は青みのある灰色である。鏡の背面は無文のものが少数あるが、大多数は文様をもつ。おもに弦文鏡（図1）、山字文鏡（図6）、蟠螭文鏡^{ばん ち}と連弧文鏡があり、なかでも弦文鏡がもっとも主要な鏡式である。

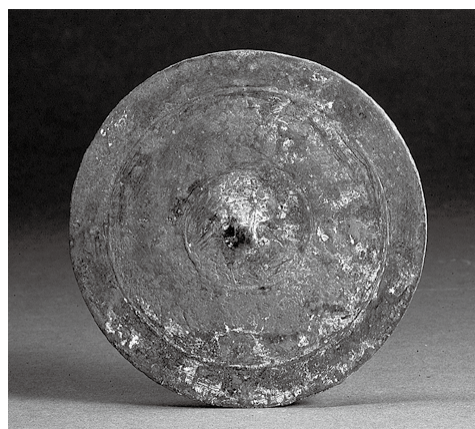


図1 西安市尤家荘で出土した弦文鏡



図2 西安市尤家荘で出土した花葉文鏡

一、陝西地区で出土した秦鏡の概況

1. 時代

時代については、陝西省鳳翔県秦公1号大墓^{ほうしやう}で出土した蟠螭文鏡（図3）1面と無文鏡1面が今のところもっとも古い秦鏡で、いずれも春秋時代中期のものである。これに次ぐのが、



隴県店子と咸陽市任家嘴秦墓でそれぞれ1面ずつ出土した、主題の文様のなかに点を充填した双圈怪獣文鏡であり、戦国時代中期のものである。そのほかの絶対多数の銅鏡は戦国時代後期および秦統一時代のものである。これは秦鏡が繁栄を迎えた時期に当たるが、その前の時期における秦鏡の発見件数は微々たるものであり、同時期の楚国における銅鏡の数量と比べるとはるかに及ばない。

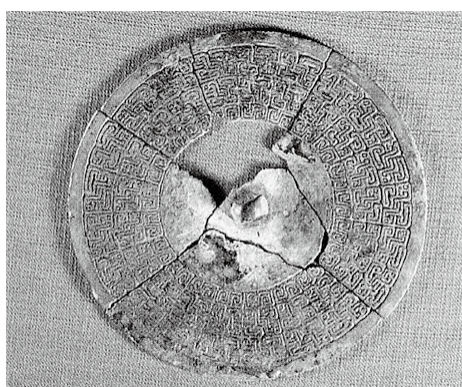


図3 鳳翔県秦公一号大墓で出土した蟠螭文鏡

2. 数量と分布

銅鏡の数量を比較すると、比較的古い陝西省隴県店子遺跡で発掘された224基の秦墓から3面出土している。銅鏡を出土した墓の割合は全体の1%である。陝西省鳳翔県高莊遺跡における46基の秦墓で出土した銅鏡は4面、鳳翔県西村で発掘された戦国時代の秦墓42基で出土した銅鏡は1面であった。これらの墓地はいずれも秦の旧都・雍城ように属するものであり、銅鏡出土墓の割合は6%に届かない。ほかの主要な秦墓の遺跡における銅鏡の出土面数と発掘された墓の件数全体に占める割合は、次の表の通りである。

墓地遺跡の名称	秦墓の数 (基)	出土した 銅鏡の 面数	墓全体に対する 銅鏡を出土する 墓の割合
咸陽市任家嘴遺跡	242	3	1%
咸陽市塔兒坡遺跡	381	25	6%
西安市半坡遺跡	112	5	4%
西安市尤家莊遺跡	197	16	8%
西安市北郊遺跡	123	12	10%
西安市南郊潘家莊遺跡	62	16	25.8%

数量については、時代が新しくなればなるほど、銅鏡の出土面数も増加し、墓全体に対する銅鏡を出土する墓の割合も増える。出土地点については、西から東へ拡大していった秦人の基本的な活動範囲と一致している。すなわち、関中盆地西部の鳳翔県から関中盆地中部の咸陽市、西安市にかけての範囲であり、なかでも西安・咸陽地区に分布が比較的集中しており、陝西省南部と北部では極めて少ない（図4）。その分布の変化について時間と空間から見てみると、銅鏡を出土する秦墓の特徴は時代が新しくなるほど、出土位置は首都に近くなるか東漸する。また、銅鏡の数は多くなり、集中して分布するようになる。



図4 秦鏡分布図



3. 種類

秦鏡の種類は、時代が下るにつれてより豊富になっていく。常見される無文鏡、弦文鏡のほかに、楚文化の要素が濃厚な蟠螭（爬）文、菱形文、禽獸文が見られる。とはいえ、弦文鏡が絶えず絶対的な優勢を保ち、数量の点でもっとも多く、存続した時間も長い。陝西地区における存在感はとくに突出しており、典型的な秦文化の伝統的な鏡式であると言える。そのうち、弦文が1周のものは少なく、2周するものがもっとも多い。いずれも細い凸線で表わされた弦文であり、弦と弦のあいだをしばしば等間隔に保つことで、均整な配置と視覚効果を上げる美観が追求されている。そのほか、羽状文を地とする山字文鏡は戦国時代の楚鏡によくみられる文様装飾であり、秦を主体とする文化要素ではなく、秦と楚との文化交流の産物と見なすことができる。しかし、通常よくみられる秦鏡と比べると、山字文鏡は鏡体が厚く、直径12.4センチ、厚さ0.5センチ、鏡縁の厚さ0.6センチとより大ぶりである。とはいえ、一般的な楚鏡よりも地金が粗悪なようであり、いくつもの破片に割れている。また、雲雷文を地とする連弧文鏡が1面知られている。銅質は良好で、鏡面は光沢をたたえているが、文様にはやはり似たような簡略化の特徴も見てとることができる。これらの銅鏡は、あるいは秦人が外来の楚鏡を模倣して製作した新しい鏡式であるのかも知れない。

4. 製作工芸

秦の弦文鏡にそなわる規格性の高さ、形態や大きさの斉一性、文様の均整な配置といった特徴は、いずれも湖北省雲夢県睡虎地で発

見された秦の竹簡『工律』に記された「爲器同物者，其大小、短長、廣亦必等」という要求と合致する。銅鏡を製作する際に必要な原料は銅・錫・鉛の合金（青銅）である。考証によれば、後の漢鏡の成分配合比率は銅60～70%、錫23～25%、鉛4～6%と合理的かつ安定的であったが、秦のそれはまだそれほど安定していなかったようである。それでも、秦鏡の製作と販売は塩や鉄と同じように政府の管轄だった。つまり、秦鏡は官営工房で鑄造されたのである。秦漢時代に設置された尚方^{しょうほう}の長官や副官が兵器、銅鏡などの青銅器を督造した。

5. 残存状況

秦鏡の出土状況をみると、破損している比率が非常に高く、全体平均で80%を超えており、墓地によっては97～100%にも達する。近年刊行された『長安漢鏡』のなかで紹介された西安出土の銅鏡35面には、破損していないものが1面しかなかった。西安市半坡遺跡出土の5面はすべて、咸陽市黃家溝出土の6面はすべて、西安市尤家莊^{ゆうかしょう}出土の16面は1面を除くすべて、西安市北郊秦墓出土の12面はすべて、西安市南郊茅坡^{ちんぱ}出土の14面は2件を除くすべて、潘家莊^{はんかしょう}出土の16面は3件を除くすべてが破損していた。なかには割れているだけでなく、一部の破片を欠いており、復元することができないものも含まれていた。秦時代以前に出土した銅鏡と、漢時代の割れていても欠失がなく復元可能な銅鏡とは完全に異なる。かくも高い秦鏡の破損比率は注意と考察を促さずにはおかない。

二、秦鏡破損の原因および秦人の破鏡習俗

秦鏡破損の原因について、秦鏡の作りが劣



悪で、地金が粗雑であり、鏡体が薄くて脆いことに求めることが一般的である。あるいは、副葬用の明器は造りが簡単であることや、埋蔵条件などの物理的な自然環境が原因であるという向きもある。しかし、著者はすべてが物理的な原因にあるのではなく、そのほかのより深い意識形態にも原因があるものと考えている。

第一に、筆者は秦鏡の破損が作りの悪さ、地金の粗雑さ、鏡体の薄さや脆さなどの物理的原因にある可能性は排除しない。秦鏡の出土状況を見ると、製作工芸にかかわる原因は確かに存在する。鏡体は薄くて割れやすい。しかし、比較的厚手に作られた鏡であっても破損している。楚式の山字文鏡でも同様のことを発見した。南方で出土した山字文鏡は基本的にみな完形を保っているが（図5）、西安出土のものはすべて破損していた。たとえば、西安市尤家荘出土（図6）と西安市北郊出土の2面の山字文鏡は、鏡体の厚さが0.5センチあるが、地金が劣悪であり、出土時はいくつもの破片に割れていた。これら2面の銅鏡は合金成分の配合比率など材質に原因があったことは想像に難くない。しかし、この種の材質が問題で破損した銅鏡の数は少なく、全体に占める割合は2%に至らない。材質の問題は秦鏡破損の主要な原因ではないであろう。

第二に、筆者は秦鏡破損の原因を人為的な破壊にあったと考える。

1. 秦鏡と漢鏡と秦時代以前の出土した銅鏡との比較を通して、ある秦鏡は同時期の楚鏡および後の漢鏡に比べても薄いわけではなく、地金と金属成分配合比率も新石器時代や殷周時代のそれに比べて遜色のあるわけでは



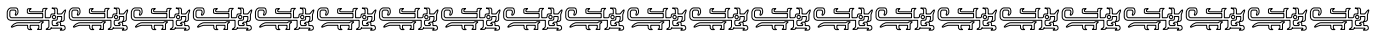
図5 湖南省の楚墓で出土した山字文鏡



図6 西安市尤家荘で出土した山字文鏡

ないことに気がついた。秦の弦文鏡にそなわる規格性の高さ、形態や大きさの斉一性、文様の均整な配置などから考えても、秦人の銅鏡製作はこのように高度な規範化や標準化を成しうるほどだったのであり、技術上の問題は存在しないはずである。秦の始皇帝陵で出土した大型で精美な銅車馬、銅鼎および完璧に近い造形の青銅製武器から推測するに、秦人の青銅成分配合比率と青銅器製作の技術はすでに相当高い水準に達していた。銅鏡の製作が武器ほど重視されていなかったとしても、触れれば壊れてしまいそうなほどひどい仕上がりにはならなかったであろう。

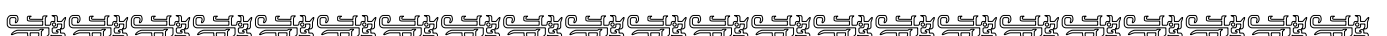
2. 発掘された考古資料の数多くの現象も



人為的な破壊を反映したものが実際にある。たとえば、ひとつの墓から出土した副葬品のうち、銅鏡だけが壊れていて、ほかのものがすべて完全な形で残っている場合がそうである。また、出土時に幾重にも麻布で包まれた痕跡を示す銅鏡でありながら、壊れていた場合もそうである。さらには、1面の銅鏡が3つの破片に割れ、それぞれ被葬者の頭部横と腰の部分で見つかった場合、銅鏡は副葬前に故意に割られて別々に置かれたことを示す。もっとも、盗掘者による攪乱を受けていないことが前提になるが。これらの現象は明らかに、秦墓で発見される銅鏡破損の原因と銅鏡の材質とが必然的な関係にあるわけではないことを物語っている。秦人が墓に銅鏡を副葬する際には故意にそれを破壊する習俗が存在したのであり、材質の良好な鏡であってもそれを免れることはできなかった。薄くて脆弱な秦鏡であっても、比較的精緻にできた楚鏡であっても、秦では打ち壊してから副葬したのである。

3. 外来的な要素をもった秦文化とは異なる墓では銅鏡を壊すことはしていないようである。地金が比較的粗悪な秦鏡が副葬されていても、無傷のまま完全な形を留めている。この点は西安市南郊潘家莊墓地遺跡でもっとも明瞭に現れている。潘家莊で発掘された墓62基のうち屈肢葬だったのは2基だけで、そのほかの大多数は伸展葬だった。さらに40基の墓の副葬品は三晋地区（黄河中流域）の典型的な鼎・盒・壺の組合せからなっており、巴蜀文化の特徴もある程度含まれていた。筆者はこの墓地の被葬者の大多数が秦本土の人々ではなく、関中盆地にやって来て秦文化を受

け入れた外来の人々だったと考えている。土器に刻まれた「南陽趙氏十斗」等の銘文からは、この土器が南陽から遷ってきた移民の持ち物であったと考えることができる。この墓地に副葬された銅鏡は16面にも達する。副葬品をもつ墓全体の26%に相当する墓から銅鏡が出土したことになる。既知の秦墓のなかでも出土した銅鏡の数はほぼ最多である。そのうち3面が蟠螭文鏡で、1面が完形。10面が弦文鏡で、2件が完形。その他の3件は破損が著しく、鏡式を識別することができない。この関中盆地に移り住んだ外来の移民墓地は自身の文化に固有な伝統をある程度保持していることが明らかである。たとえば、副葬品の組合せに三晋两周文化の濃厚な要素が現れており、副葬された銅鏡の数が多い。また、咸陽の近くに居住をしていたため、秦文化の強烈な影響を受けることは避けられなかったものの、それでも旧来の思想観念と風俗習慣を保持していた被葬者がおり、“破鏡”の習俗を完全に受け入れたわけではなかった。これは同一時期に営まれた西安市郊外の秦本土文化の墓地と鮮明な対比をなしている。たとえば、西安市茅坡郵電学院墓地遺跡で人骨の残っていた143基の墓のうち屈肢葬だったものが126基あった。これは全体の88%を占める。副葬された銅鏡は12面あり、銅鏡をとまなう墓は全体の8%を占める。そのうち10面が破損していた。西安市北郊で発掘された123基の秦墓も屈肢葬を典型的な埋葬形態としていた。出土した秦鏡は12面で、これを出土した墓は全体の10%未満であった。12面の銅鏡のうちすべてが破損していた。副葬に鏡を用いることが少なく、破鏡現象の多い特徴を示している。





4. 今日にいたるまで、関中盆地の葬送に関する習俗のうち、土器の盆を壊して被葬者を埋葬する現象が普遍的にみられる。

以上の内容を根拠として、私たちは破鏡が屈肢葬と同じように秦人特有の埋葬習俗で

あったと推定する。破鏡習俗の流行時期と秦の繁栄した時期は一致しており、おもに戦国時代後期から秦統一時代にかけての時間幅に収まる。

(翻訳 川村佳男)



宋遠茹 [Song, Yuanru]

1965年7月16日生まれ。陝西省西安市出身。西北大学歴史系考古專業本科卒業。学士(歴史学)。1990年より陝西省考古研究院にて勤務。

おもに秦漢考古の発掘と研究に従事し、これまでに30箇所以上の発掘現場に参加した。執筆した考古発掘簡易報告と学術論文は20篇余り、正式な発掘報告書1冊。このほか、専門雑誌『考古与文物』の秦漢時代の原稿編集と文物考古專業図書館の管理に従事している。





報告2 秦王朝を駆けた馬

菊地大樹（京都大学人文科学研究所 特別研究員）

はじめに

中国古代の代表的な六畜（牛、馬、羊、猪、狗、鶏）のなかで、馬は祭祀や軍事のみならず、権力や交易とも深いかかわりをもつ家畜であり、馬の生産は、国家の基幹事業と位置づけられていた。諸侯の末席に名を連ねていた秦国が、その後、東方六国を統一するまでに躍進した要因のひとつには、「秦帶甲百餘萬、車千乘、騎萬匹」（『戦国策』韓策一）にみるように、多くの軍馬を有する強大な軍事力が背景にあった。始皇帝陵から発見された兵馬俑坑からは、それを象徴するように、数多の軍馬俑が出土している。本発表では、秦王朝で活躍していた馬が、どのように生産され、利用されていたのか、最新の研究成果をまじえながら探っていくことにする。

始皇帝陵からみつかった馬廐坑

始皇帝陵の東側では、1976～77年にかけて、南北に連なる平面が長方形の堅穴土坑が発見された（秦俑坑考古隊1980、図1）。堅穴には、実際に馬が埋葬されており、その傍には、当時、馬の世話をしていた官職の陶俑が配置されていた。そして、出土した陶製の盆や鉢には、「中廐」「左廐」「宮廐」「三廐」「大廐」といった文字が刻まれており（図2）、秦王朝における馬廐の具体的な編

制を知ることができる。こうした官廐名については、竹簡を封印した封泥のなかにも確認できる。馬の骨から復元された体高は、140～150cmと報告されている。

このほか、2000年に始皇帝陵の陵墓から南に50mの内城から、スロープ状の墓道を持ち、平面が東西に向かって中字形を呈する陪葬坑（K0006）が発見された（陝西省考古研究所ほか2006）。前室からは加彩の文官俑が、後室には実際の馬が20頭あまり埋葬されていた。馬骨の保存状態は悪く、上部の棚木や埋土の崩落により、ほとんどが破損していたが、専門家によって丁寧に調査され、報告書に所見が記されている。それによると、顎骨には犬歯を確認できることからオス馬であり、切歯の磨滅度合いから推定される年齢は、およそ10歳である。また、一部の四肢骨は計測値が報告されており、その計測値からもとめられる推定体高は、115～154cmであった。

秦の法律をみると、馬はそれぞれ馬籍簿で厳格に管理されており、良馬の選定条件として、体高（肩甲骨上部と第一、第二胸椎が接合する部分から地面までの垂直高をいい、馬の大きさをあらわす指標、図3）は、五尺八寸（およそ134cm）以上であると記されている（睡虎地秦墓竹簡整理小組1990、図4）。



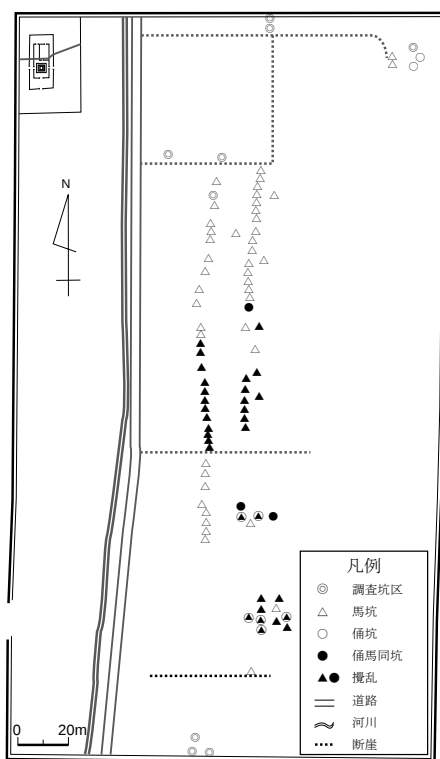


図1 始皇帝陵上焦村馬坑分布図

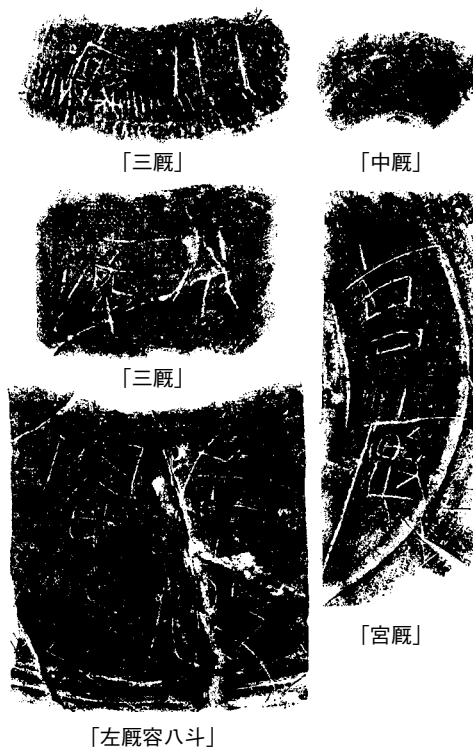


図2 始皇帝陵馬厩坑出土土器陶文



図4 睡虎地秦簡にみられる馬体高の基準

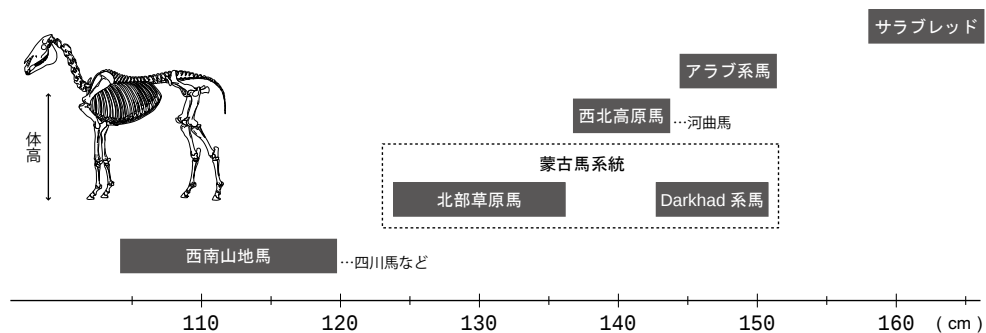
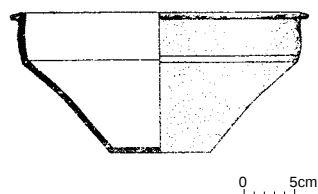
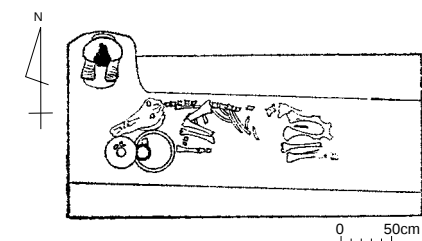


図3 現生馬の体高



兵馬俑坑から出土した軍馬俑の体高は、まさにこの基準に沿った大きさとなっている。しかし、始皇帝陵陪葬坑から出土した、実際の馬の大きさをみると、この基準に満たない馬も埋葬されていたようである。秦は、西北地域の山間地域を拠点としていた、西戎といった牧畜民たちの勢力を掌握していた。山間部では矮小馬を利用したほうが利便性がよいこともあり、秦ではさまざまな用途に応じ、多様な馬がいた可能性がある。この点については、今後、さらなる検証が求められる。

秦王朝で活躍した馬たちの様相

始皇帝陵兵馬俑坑から出土した軍馬俑は（図5-1、図録p.128）、鼻筋がとおり、サラブレッドのようにスラッとした長い足をもち、全身が引き締まった姿をしている。その姿

は、まさに理想的な軍馬像である。しかし、群雄割拠の戦国時代から統一秦にいたるまで、各国では実にさまざまな馬が活躍していたことは、これまで出土した馬意匠から窺い知ることが出来る。

河南省洛陽市唐宮西路で発見された、戦国中期の長方形堅穴土坑墓C1M7984の棺と槨の間からは、長さ15.3～17.8cm、高さ12.8～14.5cmの青銅馬が3体出土している（洛陽市文物工作隊2003）。頭には馬面ばめんのようなものを装着しているようにもみえるが、表面が荒れているため、はっきりとはわからない。頭がおおきく、首と胴部は太く、四肢もしっかりと表現されている（図5-2）。洛陽老城地区の東周墓からも、同形の青銅馬が4体出土しており、こちらは全長34cm、重さ200gにもなる（傅1956）。河南省洛陽金村から出土したと



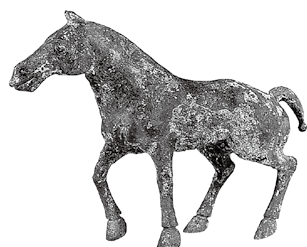
1. 始皇帝陵2号兵馬俑坑軍馬俑



2. 洛陽唐宮西路青銅馬



3. 洛陽金村青銅馬



4. 趙王陵2号陵青銅馬



5. 塔兒坡秦墓騎馬俑



6. 郵電学院南区秦墓騎馬俑

図5 戦国時代から秦代にかけての馬意匠



される青銅馬（梅原1937）もまた、唐宮路青銅馬と酷似している（図5-3）。

河北省邯鄲市の戦国趙王陵2号陵からは、長さ22.5～24.5cm、高さ15～17cmとなる青銅馬が3点出土している（図5-4）。頭部は額から吻部まで直線的であり、口元が突出している。頭部から頸部にかけての鬣は刻線で詳細に描かれている。胸部や臀部の筋肉はたくましく、ハリのある表現がなされ、四肢もしっかりと筋肉がついており、写実的で躍動感があふれている（趙建朝ほか2009）。

咸陽市の東郊外に位置する塔兒坡28057号秦墓からは、騎馬俑が2点出土している（咸陽市文物考古研究所1998）。長さ18.0～18.4cm、高さは22～22.6cmで、馬には鞍がなく、牧畜民を連想させる風貌の騎手が跨っている（図5-5、図録p.107）。中原地区で一般にみられる馬意匠は、胸と臀部の筋肉が発達した表現をしていることが多いが、この騎馬俑には、そのような特徴がみられない。ただし、胴が長く足が短いという特徴は共通している。雲夢睡虎地秦簡には、秦国が北翟の良馬である駃騠を官廐で飼養していた記述がみられる。戦国時代の後期には、秦国の勢力が北へと拡大するが、それ以前から、長城地帯の牧畜民との闊達な交流から良馬を手に入れており、騎馬俑にみられる特徴的な馬は、そうした長城地帯の良馬を模しているのかもしれない。

また、始皇帝が全国を統一した頃の西安南郊外長安区茅坡郵電学院秦墓123号墓洞室墓からも、騎馬俑が出土している（西安市文物保護研究所2004）。長さ20.2cm、高さは15.1cmで、鞍が彩色で描かれている（図5-6、図録p.109）。戦国時代の他の馬俑と同様に、胸と

臀部の筋肉が強調され、胴が長く足が短いという特徴がみられる。

秦王朝における馬匹生産

馬は、季節繁殖をする動物で、1年に1頭、春先に仔馬を産む。秦王朝では、このような馬の生態にあわせた飼養管理の年間行事が、さまざまな官職のもとで執りおこなわれていた。『周礼』という経書には、馬の生産にかかわる組織について記されている。

馬は校人を長とした飼養組織が設けられており、校人は王の馬を調教して養うことを掌っていた。校人（校：2592頭）の下には、僕夫（廐：216頭）、馭夫（繫：36頭）、趣馬（阜：12頭）、圉師（乗：4頭）というように、馬車を繋駕する4頭（乗）を最小単位として、統括する良馬の頭数に応じて官職が置かれている（菊地2012、図6）。馬の世話を専門とする圉師には、圉人がつく。圉師は圉人に馬の飼養方法を教え、圉人は良馬一頭ごとに一人が世話にあたる。馬廐坑から出土した馬丁俑は、まさにこの「圉師」または「圉人」であったかもしれない。

こうして飼養管理された馬は、満一歳で査定され、調教へと移され、廐人という官職によって去勢・訓練がおこなわれる。去勢の効果はさまざまあるが、ひとつには、気性がおさまり制御がしやすくなるという利点がある。馬車に繋がれた馬には、通常、去勢が施されている。

このほか、『礼記』という儒教経典には、季節繁殖する馬の生態に合わせた、飼養管理の年間行事が記されており（図7）、『睡虎地秦簡』という秦の法律を記した竹簡からは、

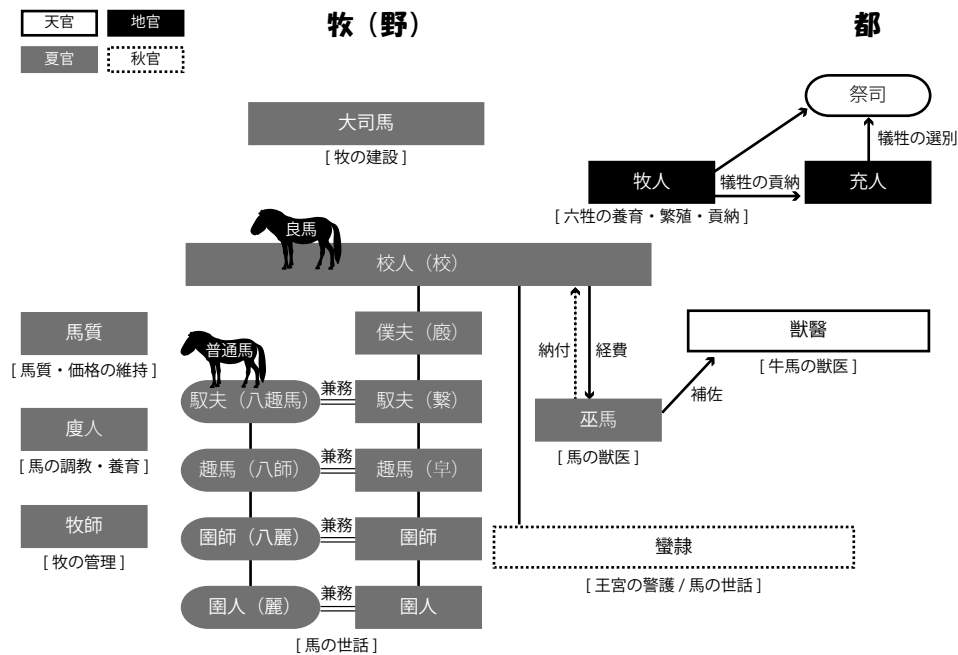
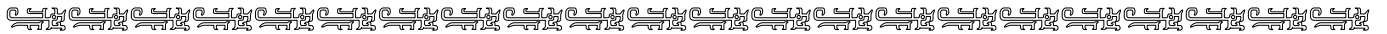


図6 『周礼』にみられる馬飼養管理組織

幼馬の保護、飼料の徴収、馬の飼養管理や死亡後の対処、牧の立地、造営と補修や衛生対策といった、秦が実施していた、馬生産に関わる具体的な政策を知ることができる（睡虎地秦墓竹簡整理小組編1990）。

さらに、古典籍や出土文字資料に記された馬の生産にかかわる内容について、近年、動物考古学的研究による実証的な検証が進んでいる。それによると、仔馬が母馬から離され調教がはじまると、牧草を食む自然放牧から、粟などの栄養価の高い雑穀類が給餌されることがわかってきた。こうした馬を熟知した飼養管理体制のはじまりは、すでに西周時代には確認されているが、いまだ萌芽的なものであった。しかし、戦国時代の秦国ではすでに成熟しており、秦王朝に引き継がれるとともに、確立されていったことが明らかとなっている。それを裏付けるかのように、始

皇帝陵の東側で発見された馬厩坑からは、粟などの雑穀が入った盆や鉢が出土している（秦俑坑考古隊1980）。

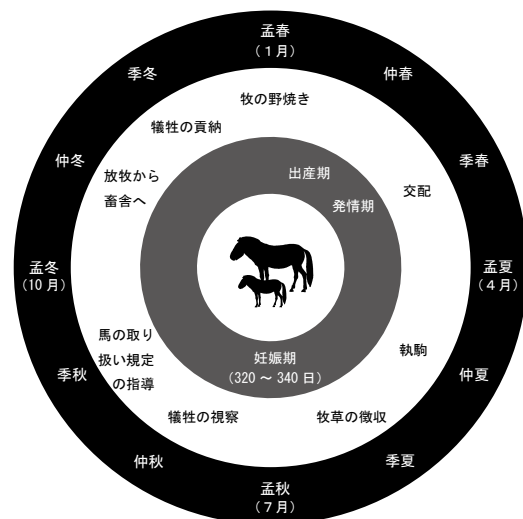
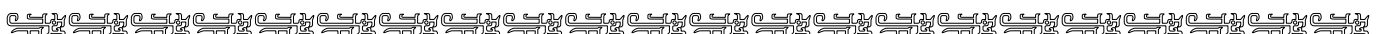


図7 『礼記』にみられる馬飼養の年間行事



おわりに

戦国時代後期になると、長城地帯の農牧接触地帯では牧畜民との接触が活発となる。秦国では、北方系意匠を取り入れた長方形帯飾板が製作されるようになり、諸侯や長城地帯の匈奴などに威信財として配布される（小田木2005）。また、秦の領域である甘肅省東部の平涼県廟莊墓地（魏1982）、天水市張家川自治県馬家塬墓地（甘肅省文物考古研究所ほか2008等）や同省秦安県王窪墓地（甘肅省文物考古研究所2012）においても、戦国時代後期から秦初期にあたる墓葬が発見され、戦国時代後期に秦の勢力が活発化し隴山地域へ北進するなか、西戎との接触を繰り返すなかで、長城地帯の頭骨犠牲と中原の車馬埋葬制度とが融合した、折衷型の馬牲が出現する（菊地2014）。

このように、西戎を従え匈奴と積極的な交流をもつなかで、駄騾のような良馬を獲得しながら、一方で、成熟した養馬技術と厳格な飼養管理のなかで組織された軍馬を背景として、遂に始皇帝は東国六国を制して天下を統一する。そして、秦王朝で確立された馬匹生産体制はつぎの漢王朝へと受継がれ、ついには、古代日本へと伝わっていくのである。

引用・参考文献

秦俑坑考古隊1980「秦始皇陵東側馬廐坑鉗探清理簡報」『考古与文物』1980年第4期
陝西省考古研究所・秦始皇兵馬俑博物館2006『秦始皇陵

園考古報告書（2000）』文物出版社

睡虎地秦墓竹簡整理小組編1990『睡虎地秦墓竹簡』文物出版社

洛陽市文物工作隊2003「洛陽市唐宮西路東周墓發掘報告」『文物』2003年第12期

傅永魁1956「洛陽市清理一座東周墓出土四匹銅馬」『文物參考資料』1956年第9期

梅原末治1937『洛陽金村古墓聚英』小林寫真製版所出版部
趙建朝・李海祥2009「河北邯鄲趙王陵二号陵出土の戦国文物」『文物』2009年3期

咸陽市文物考古研究所1998『塔兒坡秦墓』三秦出版社
西安市文物保護研究所2004『西安南郊秦墓』陝西人民出版社

菊地大樹2012「先秦養馬考」『文化財論叢』Ⅳ、奈良文化財研究所

小田木治太郎2005「北方系長方形帯飾板の展開－西安北郊秦墓出土鑄型の分析から－」『中国考古学』第5号

魏懷珩1982「甘肅平涼廟莊の兩座戦国墓」『考古与文物』1982年第5期

甘肅省文物考古研究所・張家川回族自治県博物館2008「2006年度甘肅省張家川回族自治県馬家塬戦国墓地發掘簡報」『文物』2008年第9期、早期秦文化聯合考古隊・張家川回族自治県博物館2009「張家川馬家塬戦国墓地2007－2008年發掘簡報」『文物』2009年第10期、早期秦文化聯合考古隊・張家川回族自治県博物館2010「張家川馬家塬戦国墓地2008－2009年發掘簡報」『文物』2010年第10期、早期秦文化聯合考古隊・張家川回族自治県博物館2012「張家川馬家塬戦国墓地2010－2011年發掘簡報」『文物』2012年第8期

甘肅省文物考古研究所2012「甘肅秦安王窪戦国墓地2009年發掘簡報」『文物』2012年第8期

菊地大樹2014「馬牲の境界」『中華文明の考古学』同成社

図版出典
図1、2 秦俑坑考古隊1980を筆者改変

図3 筆者作成

図4 睡虎地秦墓竹簡整理小組編1990より転載

図5 1.陝西歴史博物館編2014『驍騰万里』三秦出版社、2.洛陽市文物工作隊2003、3.梅原1937、4.趙建朝ほか2009、5.咸陽市文物考古研究所1998、6.西安市文物保護研究所2004より転載

図6、7 筆者作成



菊地大樹 [きくち・ひろき]

1976年生東京都出身。京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程を修了し、現在、日本学術振興会特別研究員PD（京都大学人文科学研究所）、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター客員研究員（2011年～）、学習院大学国際研究教育機構客員研究員（2013年～）。人間・環境学博士。主な論著に、「西周王朝の牧経営」（『中国考古学』第14号、2014年）、「中国先秦時代馬の様相」（『動物考古学』第30号、2013年）、「先秦養馬考」（奈良文化財研究所 編『文化財論叢』Ⅳ、2012年）などがある。



報告3 秦始皇帝陵および陪葬坑の考古学的新発見

陳洪（秦始皇帝陵博物院 副研究館員）

秦の始皇帝陵は陝西省西安市臨潼区の驪山南麓にあり、その面積は56平方キロメートルにまで達する。2009年に秦始皇帝陵博物院が成立すると、陵区の範囲内において大規模な考古学のボーリング調査と発掘が開始された。近年における始皇帝陵の考古学的新発見には、兵馬俑1号坑、百戲俑（雑技俑）坑、文官俑坑、石製甲冑坑などの陪葬坑のほかに、始皇帝陵園内でみつかった陵寢建築群、合葬墓園、門闕などの遺構がある。目下、兵馬俑1号坑で発掘が継続されているほか、百戲俑坑と文官俑坑もすでに室内展示施設が落成して一般公開されている。

1. 始皇帝陵園

近年継続して行われた広大な面積に及ぶボーリングと試掘によって、始皇帝陵園の考古学にはいくつかの新しい収穫があった。陵園内城の西北部と東北部にそれぞれ巨大な陵寢建築群と合葬墓園が発見された。また、帝陵北の内城壁と外城壁のあいだには門闕遺構が、帝陵西の内城壁と外城壁のあいだには建築遺構が、陵園内城北部には道路遺構が、墳丘の西北側には外蔵坑などが見つかった。

2. 1号兵馬俑坑

兵馬俑坑は始皇帝陵の地下に築かれた大

量の陪葬坑のうちの1つである。1号兵馬俑は1974年に発見され、1979年に外部に公開されるようになった。出土した俑の数がもっとも多い兵馬俑坑であり、面積は14260平方メートルである。1978～1984年の第1次発掘、および1985年の第2次発掘はいずれも陝西省考古研究所秦俑考古隊によって執り行われた。第1次発掘は発掘した面積が2000平方メートルで、東部のグリッド5個を範囲とし、1087体の俑が出土した。第2次発掘では2000平方メートルの面積を発掘し、中部と北部のグリッドを範囲とした。遺構と遺物は現場でそのまま保存し、それ以上の保存処理はまだ行わなかった。2度の発掘で実際に発掘した面積は1号兵馬俑坑全体の面積のうち3分の1に及ばなかった。2009年6月13日から始まった第3次発掘では、200平方メートルの面積がすでに発掘された。これまでのところ、1号兵馬俑坑に対する第3次発掘では200体近くの俑が出土した。俑の表情や容貌にはそれぞれ特色があり、また服装、髪型、武器や装備などもそれぞれ異なっている。これらの俑には鎧を着た歩兵俑、車兵軍吏俑があり、高さは1.8～2.0メートルのあいだに収まる。

1号兵馬俑坑には炭化した痕跡が広い面積に及んで存在する。俑坑の木でできた構築物は火災によって焼けおちているため、兵馬俑の



多くが甚大な破壊を受けている。考古学者が推測する俑坑の火災の原因は3つある。ひとつは「燎祭^{りょうさい}」である。これは一種の葬送儀礼であり、供物や墓上に築いた建物を故意に焼き払う。この説で説明できないのは、「燎祭」であるのに、なぜ3号兵馬俑坑は焼かれていないのか、という点である。第2の説はメタンガスによる自然発火である。坑内の副葬品に含まれていた有機物が腐敗してメタンガスが発生した、というものである。やはりこの説も同じ環境条件下にあった3号兵馬俑坑でなぜ発火しなかったのか、という説明をすることはできない。第3の説は項羽の率いる軍隊に焼き払われた、とするものである。『漢書』『史記』『水経注』などの歴史書の記載によれば、項羽の軍隊は秦の宮殿を焼き払い、その大火は3カ月も燃え続けた、とある。しかし、歴史書に始皇帝陵および陪葬坑を焼いたという記述はない。

発掘担当者は発掘中に、過洞（兵馬俑を並べた東西に延びる長さ約200メートルのトンネル状遺構で、11列が併行する）と甬道（過洞を結ぶ南北方向の連絡通路）付近の俑は破損が著しく、ここの木造構築物（壁や天井）は白く炭化し、当時の燃焼温度がかなり高かったことに気がついた。これにより、兵馬俑坑は故意に焼き払われたのであり、自然火災ではなかったと推測される。兵馬俑の破損部分をつぶさに研究したある専門家は、兵馬俑坑が焼かれる前に、俑はわざと破壊されていると考えている。燃えた位置や火の勢いは同じではなかったなので、ある兵馬俑は修復した後も部位によって色が異なっている。このほか、1号兵馬俑坑の底部には大量の泥が堆積していた。兵馬俑坑を建設したのは雨季に当た

り、雨水が坑内に浸入したせいであろうと推測される。

兵馬俑坑からは4万件近くもの武器が出土した。多くは劍、鉞^ひ、戟^{げき}、戈^か、矛^{やひり}、鏃^{やじり}など青銅製の武器であり、鉄器（矛、鏃）は極めて少ない。1号兵馬俑坑の第3次発掘では次のような新たな成果があった。

（1）彩色兵馬俑（図1） 今回発見された兵馬俑は彩色の残っていた表面上の面積が小さかったとはいえ、彩色兵馬俑の個体数が多かった。見つかったなかでは歩兵俑がもっとも多く、その髪型はいずれも扁平な髻^{もとどり}を結っていた。つまり、髪の毛を全部で6つの幅広い束に編んでから、後ろに折り返し後頭部で髪留めを使って固定している。俑の頭髪は多くが黒か褐色である。皮膚は淡いピンクか濃いピンクで塗られている。服の色にも違いがあり、袖は赤や紫などの濃くて強い色調の色を多用する。鎧の種類は兵種や階級によって異なる。歩兵俑の鎧は札^{さね}が多くて丈が長めに作られる。両肩は肩甲^{かたがしら}がそなわる。肩甲は瓦に覆われているように札を綴り合せてできている。鎧の札を留める釵^{ひしぎ}はナツメ色、薄紫、空色などたくさんの色を用いている。釵によっては褐色漆を下地として赤を塗り、さらに白



図1 〔参考〕2号兵馬俑坑で出土した彩色兵馬俑
©陝西省文物局・陝西省文物交流中心・秦始皇帝陵博物院



を上塗りしたものもある。秦人の服飾の多様性と秦軍の鎧に見られる札の綴り方の多様性が表わされている。

(2) ^{きゅうど}弓弩と^{どとう}弩韜（弩を包む袋） 1号兵馬俑坑では木製の弓や弩弓の痕跡が数多く見つかっている。騎兵、車兵、歩兵が混成する2号兵馬俑坑でも弩弓の残骸が発見されている。今回発見された新しい弩弓は、弦、弓の部分、弩機などの輪郭がいずれも鮮明で、保存状態が比較的良好だった。いっしょに出土したものに大量の青銅製鏃がある。この弩弓を計測したところ、湾曲した弓の部分の長さが約145センチ、弦の長さ約120センチであった。これらの計測値は過去に見つかった弩弓のものと基本的に一致する。この弩弓にそなわった弦は表面が光沢を帯びており、その材質は動物の筋ではないかと思われる。このほか、二枚貝の貝殻に似た弩韜の織物の痕跡が見つかった。弩韜は表面に漆が塗られ、全長が150センチあり、俑の足元に落ちていた。

(3) ^{えびら}箠（矢の箱） 2両の戦車のうゑに沢山の竹をフレームとする箱型の遺物の痕跡が見つかり、なかには鏃が束になってあった。歴史文献の記載と出土状況を照らし合わせることで、これが弓と弩弓のための箠、つまり矢を容れておくための箱であり、戦車の装備であったと推定できる。

(4) 彩色漆鼓 今回の発掘で2箇所から彩色された太鼓の鼓面が見つかった。埋土の土圧を受けて、鼓面の上部は鼓壁に陥没しており、鼓面の下部といっしょにくっついてしまっている。漆鼓の縁辺にある白い縫い合わせ線の痕跡もたいへん明瞭である。漆鼓の痕跡は兵馬俑坑内でこれまで何度も発見されたことはあるが、革でできた鼓面の遺存が見つ

かったのは初めてのことである。

(5) 彩色漆塗革製盾 始皇帝陵で初めて出土した「盾」は1号銅車馬にともなう「銅盾」であった（図2）。発見当時、銅盾は実物の2分の1の大きさであると推測された。今回初めて1号兵馬俑坑の軍陣において革製の盾が見つかった。盾の高さは約70センチ、幅約50センチ。サイズは銅車馬にともなう銅盾のちょうど2倍あり、秦軍が使用した盾の大きさに対するかつての推測が間違っていなかったことを証明した。この彩色をもつ盾は戦車のうゑで将兵が防御のために用いたものであり、文様装飾は非常に細緻である。



図2 1号銅車馬の銅盾

(6) ^ひ彩色漆塗柶 柶とは古代の武器に装着した長柄を表わす用語で、木製の竿を芯とし、外側に竹片を貼り、絹糸と革帯を巻いてできている。今回発見された2本の漆塗り柶は、文様の図案が完全な状態で残り、色彩も艶やかである。

(7) 紫色の顔料“中国紫” 兵馬俑に塗られた紫色の顔料の成分はケイ酸銅バリウム（BaCuSi）である。この種の紫色顔料は、いまだ自然界で発見されたことのないため、





人工的に作られたものと考えられてきた。紫色顔料はもっとも古いもので戦国時代に出現している。1992年、初めて漢時代の器物から科学者がケイ酸銅バリウムを発見したことから、略称「漢紫」と呼ばれてきた。その後、秦の兵馬俑の彩色から大量に発見されたため、いまでは「中国紫」と呼ぶのが一般的である。

3. 百戲俑坑（陪葬坑K9901）

百戲俑坑は始皇帝陵の外城東南隅に位置する。発掘担当者は百戲俑坑のなかに広い面積にわたって黒色炭化層の分布していることに気づいた。版築層の土は熱を受けてレンガ色になっており、ここがかつて焼き払われたことを物語っている。「百戲」は古代演芸芸術の総称であり、芸の内容として重量挙げ、刀呑み、火渡り、竿のぼり、相撲などが含まれている。試掘坑から出土した俑の姿態から、これらの俑が演じている芸は扛鼎や皿回しなどであると考えられる。扛鼎は戦国、秦漢時代に広く流行した鼎を持ち上げる一種の力比べである。『史記』秦本紀に、秦武王4年（紀元前307年）、「武王力有り戲を好む。力士任鄙、烏獲、孟説みな大官に至る。王、孟説と挙鼎し、臍を絶す。八月、武王死し、孟説を族す」とある。つまり、力自慢だった秦の武王が臣下の者と鼎を持ち上げて力比べをしていたとき、膝を負傷して治らないまま絶命したのである。百戲俑坑の天井板の上方では重

さ200キロもの大銅鼎が発見された。天井の下には右腕を高く挙げて鼎を持ち上げた姿の俑がちょうどあることから、この鼎は百戲の「扛鼎」を行う道具であると推測した。俑が銅鼎の重量に耐えることはできないため、天井板の上に置いて象徴化したのである。

4. 文官俑坑（陪葬坑K0006）

K0006とナンバリングされた文官俑陪葬坑は、内城の始皇帝陵墳丘の西南隅に位置する。平面は中字形を呈し、スロープと前室、後室からなる。総面積が小さめで、すべて木造建材からなる陪葬坑である。地下宮殿からもっとも距離が近い陪葬坑のひとつでもある。このような位置は、この坑の重要性を物語っている。坑内からはおもに木車1両、御者俑4体、文官俑8体、馬の骨格24頭分が発見された。

（翻訳 川村佳男）

参考文献

陝西省考古研究院・秦始皇兵馬俑博物館編著『秦始皇帝陵園考古報告（2000）』文物出版社、2006年
陝西省考古研究院・秦始皇兵馬俑博物館編著『秦始皇帝陵園考古報告（2001-2003）』文物出版社、2007年
秦始皇帝陵博物院編著『秦始皇帝陵園考古報告（2009-2010）』科学出版社、2012年
秦始皇帝陵博物院『秦始皇帝陵博物院（総壹輯）』三秦出版社、2011年
秦始皇帝陵博物院『秦始皇帝陵博物院（総貳輯）』三秦出版社、2012年
秦始皇帝陵博物院『秦始皇帝陵博物院（総参輯）』三秦出版社、2013年
秦始皇帝陵博物院『秦始皇帝陵博物院（総肆輯）』陝西人民出版社、2014年



陳洪 [Chen, Hong]

1966年中国遼寧省昭烏達盟生まれ。2007年、九州大学比較社会文化研究科博士後期課程を修了、博士（考古学）。2009年より現職。秦文化の考古学研究に取り組み、「関中秦墓出土青銅器編年研究」、「関中秦墓出土陶器編年研究」など論文20本余りを発表。





秦早期の陵墓と祭祀遺跡がある甘肅省礼県大堡子山遺跡（上）とその発掘現場（下）

特別展「始皇帝と大兵馬俑」開催記念国際シンポジウム

秦王朝と兵馬俑
—発掘された歴史の実像—

発 行 日 平成27年12月19日
編集・発行 東京国立博物館
制作・印刷 大協印刷株式会社

